「 キリストからの祝福 」①心の貧しい人へ　　マタイ 5：1〜3

今朝の箇所は、主イエスがガリラヤ湖を見下ろす山の上で語られた言葉で、ここから 7 章までは「山上の説教」と呼ばれています。（山上の垂訓と言ったりもします）この「山上の説教」はとても有名な箇所で、一般の書物にも良く引用されますし、主イエスの生涯を描いた映画では必ず出てくるシーンです。せっかくですからこの話が出てくる実際の場所の写真を見ておきましょう。写真の建物はその名も「山上の垂訓教会」で、あと教会付近と後ろのガリラヤ湖の風景です。こんな光景が浮かんできます。主イエスはガリラヤ湖からまっすぐ頂きを目指して黙々と山を上ってゆきます。そのあとを主イエスの弟子たちと大勢の群衆がぞろぞろと続いていきます。山の上は広い台地になっていて、そこに着くと、主イエスはふりかえって、あとからついてきた弟子たちや何百人という群衆のほうに目を向けます。そして、そこにあった岩の上に腰を降ろし、これから口を開こうとします。人々は少しでも近くでその声を聞こうと、主イエスの足元までびっしりと押し寄せてきます。そして主イエスの言葉を聞き漏らすまいと、耳を傾けている群衆に、主イエスが語りかけます。

１）幸いを宣言する主イエス

主イエスの口から出た最初の言葉は「心の貧しい者」ではなく「さいわいである」という言葉でした。文語訳の聖書では「幸福（さいわい）なるかな、心の貧しき者…幸福なるかな、悲しむ者…幸福なるかな、柔和なる者…幸福なるかな、義に飢え渇く者」と、元の言葉の順序で訳されています。この「さいわい」という言葉は、「祝福されている」という意味の言葉ですので、主イエスはご自分のまわりに集まった大勢の人々にまず「あなたがたは神の祝福を受けています」と「祝福宣言」をされたのです。

人々はこれを聞いて驚いたことでしょう。なぜかといえば、主イエスのもとにやってきた人々の多くは、自分たちのことをそんなに幸いな者だとは考えていなかったからです。今朝の箇所の少し前、マタイ 4:23-25 に、こう書かれています。「主イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。主イエスのうわさはシリヤ全体に広まった。それで人々は、さまざまな病気や痛みに苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人などをみな、みもとに連れて来た。主イエスは彼らをいやされた。こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆が主イエスにつき従った。」つまり主イエスに従ってきた人たちは、病気をはじめとして、この世でさまざまな苦しみを受けていた人たちだったのです。日本では、その家に不幸があったり、その人に災難が続いたりすると、それを「罰」や「たたり」だと考えることがあります。人から、同情よりも冷たい視線を向けられることもありますし、本人もそんな思いに取り憑かれたりして、苦しみから立ち上がれないことがあります。それは主イエスの時代のユダヤでも同じでした。健康で、裕福で、何の問題もない人は神から祝福されているが、そうでない人は神の祝福から遠のけられていると思われていたのです。ですから主イエスのもとに集まった人たちの多くは、何かの苦しみや痛みをかかえており、そのため自分たちは神の祝福から遠いと感じていたのです。

ところが、主イエスは、そうした人々に、開口一番、「さいわいです！」「祝福されています！」と宣言されたのです。なぜでしょうか。それは主イエスが苦しみや痛み、困難や悩みが人を駄目にしてしまうものではなく、そうしたものも、神によって、幸いに変えられ、祝福となることを知っておられたからこそそう言われたのです。

主イエスは、わたしたちに幸せになるために何かを得るようにとか、何かをしなさいと勧めているのではありません。神様がさいわい、祝福を与えてくださるのでそれを得るのはどのような人であるのかを教えて下さっているのです。その第一が、「心の貧しい人」です。

２）心の貧しい人とは

「心の貧しい人」とはどんな人でしょうか。ここでいう「貧しい」とは、経済的に貧しいということだけではありません。主イエスに従った人々の中には裕福な人たちも多くいました。ルカ 8:3 に「自分の財産をもって彼らに仕えているヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか大ぜいの女たちもいっしょであった。」とあります。ユダヤの議会の議員であったアリマタヤのヨセフは自分のために作った墓に主イエスを葬っています。同じく議員であったニコデモは遺体に塗る大量の香油を持ってきました。ニコデモもヨセフも裕福だったので、そうすることができたのです。初代教会で大きな役割を果たしたバルナバはたくさんの財産を持っていて、それを教会にささげました。使徒パウロもある程度の資産があったと思われます。この人たちは財産があっても、財産に心を奪われず神に目を向け、財産や地位に頼らず神に頼った人々でした。

聖書では、「貧しい人」という言葉は、自分の弱さ、足りなさを知って神に信頼する人々を指すときにも使われます。たとえば、詩篇 40:17 で、ダビデは「私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」と祈っています。ダビデは王であって、たくさんの財産を持っていました。彼には権力もあり、武力もありました。そうであるのに、なぜダビデは「わたしは悩む者、貧しい者」と言ったのでしょうか。それは、神を信じない人々から苦しめられ、追い詰められたとき、自分の心にそれに立ち向かうことができるだけのものを持っていないことに気付いていたからです。一国の王には、知恵、勇気、また決断が求められます。神の民イスラエルの王には、その上に、神への信頼が求められました。ダビデは困難に直面したとき、自分がいかにそうしたものに欠けた者であるかを自覚したのです。しかし、彼は、自分を嘆くだけで終わらず、神に救いと助けを求めました。「心貧しい人」とは、自分自身の、人としての貧しさ、乏しさを知っている人、そのために神に信頼する人のことです。

人が本気で神を求めないのは、何故でしょうか？一つ大きな理由は自分の貧しさ、乏しさが分かっていないからです。パウロは自分を誇り、他を軽蔑している人々にこう言いました。「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。」コリント第一 4:7-8 わたしたちが持っているもので「もらっていないものはない」というのは本当です。「これはわたしが働いて稼いだものだ」と言ったとしても、働くことができる健康、能力、また、その機会は、自分の力で得たものではありません。すべては神から「もらったもの」です。

そもそも、自分を生かしている命は、神の賜物以外の何ものでもありません。人は、神から与えられた命、また人生を正しく使い、誠実に生きる責任があります。たとえ、勉強や仕事ができ、特別な能力があったとしても、人は、人として誠実に生きるということにおいて、力の無いものです。地位のある人やオリンピック選手に選ばれるほどの才能のある人でも、その地位や才能とつりあわない、とんでもない犯罪を犯したり、不道徳のために家庭を壊したりしています。自分の貧しさ、乏しさを悟らず、自分のほうが人よりましだと考え、自己満足し、向上することを忘れてしまうと、わたしたちも同じような間違いを犯してしまいます。ですからここで主イエスが言われる「心の貧しい者」とは、自分の貧しさ、乏しさを知って、神に頼る人のことなのです。

３）心の貧しい人への祝福

それでは、心の貧しい人に与えられる幸いとは何なのでしょうか。主イエスは、「心の貧しい者は幸いである」と言われましたが、これは、数学や物理の定理や法則が語られているのではありません。文語訳

で「さいわいなるかな」と訳されているように、これは、「感嘆文」、感情のこもった叫びです。これは、主イエスがご自分の回りに集まってきた人々に、心を込めて呼びかけられた言葉です。「あなたがたは神様が祝福してくださっているのですよ。幸せ者だよ。」と言ってくださっているのです。

「幸い」と訳されている言葉は、英語では ″happy″ （ハッピー）ではなく ″blessed″（ブレスド）祝福されているということばです。″happy″ はもともとハプニングのハプンから来ています。 ハプニングとは予期せぬ出来事が起こることを言いますね。ですからハッピー（幸せ）には、「自分にとって都合の良いこと、気分の良いことがたまたま起こったので、うれしい」といったニュアンスがあります。ある国語辞書には、「幸い」を「めぐりあわせのよいこと」と定義されています。「めぐりあわせ」とは、身の回りに起こる出来事のことです。わたしたちの回りに起こる出来事は、いつも「めぐりあわせ」がよいとはかぎりません。そのような幸せに期待を寄せて生きるのは非常に心許ない気がしませんか？

しかし、″blessed″ （祝福）の「幸い」は違います。″blessed″ この幸いは「祝福された」という意味の言葉であり、この「幸い」は、神から来る「幸い」です。身の回りに起こる出来事によって左右されない「幸い」です。主イエスの回りに集まった人たちには、実際に貧しい人、社会的な地位の低い人たちもいました。病気や、その他の問題を抱えている人もいました。ユダヤの社会では、そうした人々は、神の祝福から見放されていると考えられていました。パリサイ人や律法学者たちは、そうした人々を「だが、律法を知らないこの群衆は、のろわれている。」ヨハネ 7:49 とさえ言ってなじりました。ところが、主イエスは、そうした人々をご覧になって、開口一番、「祝福されている」と呼びかけてくださったのです。そして、「天の御国はその人たちのものだから」と言って、天の御国、天国を約束してくださいました。

ヤコブ 2:5 に「神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。」とあります。ヤコブの手紙で言われている「貧しい人たち」とは、実際に貧しい人たちのことですが、信仰に富み、神の国を受け継ぐことができるのは「心の貧しい人」も同じです。自分の貧しさ、乏しさ、無力を知る人は、天にあるすべての良いもので満たされるのです。それは天に着いてからのことだけではありません。地上での生活においてもです。信仰によって天国の幸いを先取りするのです。自分の弱さ、足りなさに落ち込み、自分の無力さを思い知らされることは誰にでもあることです。しかし、そこで留まることなく、だからこそ人一倍神様は私を祝福しようとされていると生き方の方向転換する者に主は祝福と恵みを与えてくださるのです。

「わたしは悩む者、貧しい者」と祈ったダビデは、同時に「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません」詩篇 23:1 と賛美しています。心の貧しい人は、この祝福を体験することができます。「あなたは幸いですよ」「神によって祝福されていますよ」と語りかけてくださっている主イエスの言葉は、真実です。あなたが、もし「わたしは十分恵まれていて、それ以上に神の祝福などいらない」と思っていたとしても、やっぱりあなたにはこの祝福が必要です。これなしには、どんなに良いめぐりあわせの中にいたとしても、ほんとうの「幸い」はやってきません。人生がまるで運だめしのようなものになります。今こそ、へりくだり、神からの「幸い」を求めましょう。また、たとえ、あなたが、様々な問題に取り囲まれていて、「自分ほど不幸な人間はない」と思っていたとしても、主イエスがくださる「祝福」によって、あなたもまた幸いな人になることができるのです。

主イエスは、「わたしは良い牧者です。良い牧者は、羊のためにいのちを捨てます」ヨハネ 10:11 と言われました。ダビデが「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません」と言った、「主」とは、わたしたちにとって、主イエス・キリストです。主イエスはわたしたちひとりひとりを愛して、そのいのちまでもささげてくださったお方です。このお方が、あなたを祝福してくださるのです。「心の貧しい者」となって、この祝福を受けるとき、あなたもまた「幸いな人」となるのです。